

会員のば

ロンドンの花火

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

例年にない夏の暑さの寝苦しさの中、ロンドンオリンピックが開催された。早朝の実況中継で映し出される競技の熱気の後には、連続した夏日が毎日のように続いた。今、その頃のことを振り返ってみて感慨深いのは、開会式とNHKの五輪テーマソングである。

今回の開会式では、五輪個人参加選手団を含めると、205の国と地域などによる入場行進が行われた。先頭はギリシャで、最後は開催国の英国、という毎回恒例の順であったが、前回の北京大会との比較の上で、途中の入場順がどう変更されるかに興味があった。結果は、アルファベット順の英語表記国名という、きわめてオーソドックスなものであった。

すなわち、先頭のギリシャに続く2番目はアフガニスタン：Afghanistanで、以下アルバニア：Albania、アルジェリア：Algeriaと続き、日本は95番目、全体の間にあたる102番目は、キルギス：Kyrgyzstan。英和辞書のまん中あたりを開いてみるとL付近になることが知られているので、国名でも同じことが言えそうである。200番目はベトナム：Vietnam。以下、米国領バージン諸島：Virgin islands、イエメン：Yemen、ザンビア：Zambiaと続き、最後の英国の一つ前の204番目がジンバブエ：Zimbabweであった。そして、アルファベット順の入場行進が中央の丘をめぐる、その丘を囲むようにして各国国旗が立てられていく様は、小さな地球を思わせる光景であった。

前回の北京大会での入場行進順の決め方は、きわめてユニークなものであったことを覚えている。それは、まず204の国と地域を中国語で表記し、その上で、国名の最初の文字の画数の少ない順から入場行進に参加した。最初はギリシャ（希腊）、2番目はギニア（几内亚）、3番目はギニアビサウ（几内亚比绍）、4番目はトルコ（土耳其）、5番目はトルクメニスタン（土库曼斯坦）といった具合である。

日本は23番目で、その前後は21番目のバヌアツ（瓦

努阿图）、22番目のイスラエル（以色列）と、24番目の台湾（中华台北）、25番目の中央アフリカ（中非）であった。

以下、ブラジル（巴西）は38番目、キューバ（古巴）は45番目、と続き、ベリーズ（伯利兹）が100番目。150番目にオランダ（荷兰）、200番目がモナコ（摩纳哥）。最後の中国の一つ前の203番目は、ザンビア（赞比亚）であった。

外国名の漢字表記には、遠く遣隋使の時代から外国の国名を含む情報を漢字で記録してきた歴史があり、この方法は明治時代まで続いた。54番目のインド（印度）、62番目のカナダ（加拿大）、145番目のタイ（泰国）や175番目のポルトガル（葡萄牙）、185番目のスウェーデン（瑞典）などの漢字表記国名は、学校で習った覚えがある。しかしながら、115番目のイギリス（英国）はともかく、123番目のフランス（法国）、137番目のロシア（俄罗斯）、139番目のアメリカ合衆国（美利堅合眾国）、198番目のドイツ（德国）などは、なぜ、仏・露・米・独ではないのだろうかと思う。

中国語の表記から国名を推測することも、ある程度までは可能である。80番目のイラン（伊朗）、181番目のチリ（智利）、190番目のイタリア（意大利）などは容易に国名を想像できる。味のある文字を充てたなあと思われる国名もある。6番目のイエメン（也门）、56番目のリトアニア（立陶宛）、60番目のネパール（尼泊尔）、86番目のアイスランド（冰岛）、103番目のサウジアラビア（沙特阿拉伯）、107番目のアルゼンチン（阿根廷）、133番目のクウェート（科威特）などの国名が、それらである。129番目のノルウェー（挪威）や158番目のペルー（秘鲁）となると、全くお手上げである。中国語による表記文字数最長の国は、65番目のセントビンセント・グレナディーン（圣文森特和格林納丁斯）と126番目のボスニア・ヘルツェゴビナ（波斯尼亚和黑塞哥维那）で、英語表記でもそれぞれSt. Vincent Grenadines、Bosnia and Herzegovinaと長かった。

北京大会の追想はこれまでにして、ロンドンオリンピックのTV機数にもどる。先述の入場行進の前には、物語り風に英国の経済社会の変貌を、以前の牧歌的な緑の大地での暮らしから説き起こし、産業革命を経て現代に至る流れを示していた。なかでも、溶鉱炉で鍛えた赤い鉄の輪が、オリンピックをイメージする5つの輪のひとつにかわり、開会式場の上空に現われた残り4つの輪とともに五輪の形になる姿は、印象的であった。選手たちの入場行進を経て、テムズ川から会場に運ばれた聖火が点灯されると、一斉に花火が打ち上げられた。上空からの撮影が、TV画面いっぱいに映し出された。スタジアムの外周や街並から火柱が林立するような花火や打ち上げ花火が、空を、そして花火が見下ろす、選手たちが集う入場式の会場を明るく照らす。

地上の筒から吹き上がる仕掛け花火と、上空に打

ち上げられる割物花火を組み合わせた、多くの花火大会でおなじみのスターマインだろうかと思いがら眺めていたが、どこか違う。橙色を基調とした和風花火と違い、仕掛け花火の色が白っぽい明るさをしているが、これは使う火薬のせいだろう。違うのは、どうも打ち上げ花火のようである。仕掛け花火が上空で開くのは当然のこととして、開き方が日本の花火と明らかに異なっている。上空でいきなり開くのである。

日本の花火では、打ち上げられてから上空で開くまでの道筋に沿って明るい光の帯（花火の「昇り」と名づけられている）が見られるが、それが無い。そして、この「昇り」に沿って上空まで上がった花火は、一瞬その光の軌跡を消した後、点状の丸い小さな輪（花火の「芯」）を中心に、大きな輪が開くのだが、この「芯」が無い。さらに、開いた花火の大きな輪の色は単色で、日本の花火のように光の筋の変化（花火の「星」の色の变化）がなく、二重や三重の構造をしていない。とにかく仕掛け花火が、上空でいきなり開くのである。TV画面が、地上の選手の横顔に切り替わったが、上空に上がる様子を見る限りでは、「昇り」も「芯」も「星」の色の变化もない花火のようである。

花火の起源は紀元前の中国とされ、13世紀にイスラムを経てヨーロッパに伝来した後、わが国には、鎌倉時代に伝わった火薬の普及とともに、江戸時代に花火として定着したとされる。ロンドンの花火の色と形が、現在われわれが日常目にするものと異なるのはなぜだろうか、興味の尽きないところである。

TVのオリンピック中継画面の活況に寄り添うように、音楽が流れている。NHKの五輪ソング『風が吹いている』である。歌うのは、「いきものがかり」という名の3人組。ギターを抱える後方の男性2人が出会ったのは、神奈川県海老名市で入学した小学校1年生の時、一緒に金魚にエサをやる「生き物係」をしたことが、グループの命名の由来。高校1年の冬に、小田急・相模大野駅前スタートした路上ライブがグループ結成の時だという。高校2年の秋に、現在ボーカルを担当している、神奈川県厚木市育ちの女性が飛び入りで加わって現在の姿になったが、その女性の兄は男性2人の同級生で、兄の紹介で路上ライブに加わって見たのだという。

3人組が育った海老名市には、小田急と相模鉄道の乗換駅である海老名駅が、厚木市にはJR相模線と小田急との乗換駅である厚木駅がそれぞれあるが、わざわざ遠い相模大野駅を選んだのはなぜだろう。現在20代後半の3人組が高校生であった時代は、海老名駅や厚木駅は、今ほど繁華ではなかったのだろうか。小田急・相模大野駅の東京側の隣駅は、東京都町田市にある町田駅。町田市といえば、東京都域が南側にせり出して、神奈川県域にはまり込んだ位置関係にあるため、新宿から小田原に小田急で向かう

場合、東京都から神奈川県川崎市に入り、この町田市で東京都域に戻り、再び神奈川県相模原市に入るといふ、旅人泣かせの経路をたどることで有名な線区である。

大都会が常に身近にある環境で育った3人組が、自らの歌を披露する場所として、新宿への通勤客で混雑する主要な乗換駅のひとつであり、ふるさと神奈川県にもある駅である相模大野を選んだのは、自然の成り行きだったのかもしれない。今回の五輪ソングを聞いてみると、その想像はあながち的はずれではないと思われる。

“風が吹いている 僕はここで生きていく▼晴れわたる空に 誰かが叫んだ▼ここに明日はある ここに希望はある”

小学校時代の出会いに、共通の友人の妹との出会いが重なり、ふるさとの駅で腕だめしをして認められ、オリンピックのテーマソングを歌う。ここで生きてきて、これからも生きていく、3人組である。



かの少女に出会えた

胆振西部医師会

北海道社会事業協会洞爺病院

後藤 義朗

頭に青いターバンを巻き、謎めいたまなざしで振り向くのは、「オランダのモナ・リザ」と呼ばれる「真珠の耳飾りの少女」である。フェルメールが1664年に描いた少女はめったに海外出張はしない。その少女が日本にやってきた。

会議の時間を調整し上野の森を目指した。美術館に繋がる階段も順調に進み、「最後尾」のプラカード前に立つと、「50分待ち」の表示だ。えっ、前には数十人だけで、列も少しずつ前進しているのに。ほどなくその意味が分かった。幾重にも連なり蛇行し人の列でホールからあふれるほど。「50分待ち」は筆者の基準外である。だが、これを逃すと出会える機会はもうない。オランダは遠いから、今回は最初で最後のチャンスだと言いつつ聞かせ人の流れに身を任せた。

狭い空間は人息で蒸す。朝一番の疲れか眠い。でも、未知との遭遇への期待感があるので、「立待ち」の苦行にもなんとか耐えられた。

入場の一步前で、突然の停止。この入場制限が渋滞の原因だったのだ。結局、50分かかった。汗をぬぐい目当ての絵に一直線だ。だが、ここにも長蛇の列が現れ、またかと大きなため息。いや、横には特急ライン？があるではないか。目的の絵からは遠いが、人は流れている。本物に近づければそれでも良い。

かすかな照明の下、少女の姿が浮かび上がり、そして、目が合った。絵は写真と同じ構図（当たり前だ）。でも、実物は小さい。高さは牛乳パック二つ程度だが遠いのもっと小さい。期待のターバンの青色はくすんで見えたが、黄色の衣装と絶妙なコントラストを表す。色のくすみは減灯の影響か、300年あまりの歴史を物語る色調なのかは定かではない。1881年の競売時はひどい汚れて落札額はわずかだったとのこと。今回は余計なニスを除く補修も完了し、色相は改善した。「フェルメールブルー」といわれるターバンの青色は、宝石のラピスラズリを砕いた顔料だ。当時は中東のアフガニスタンからの舶来品。金と同等で高価だったから、フェルメールが没した時、妻が破産宣言をしたが、絵の具代の借財だともいわれる。でも、さすがに青だ。大きな真珠と襟の白色は大胆で、少女の顔をほのかに照らしている。

立つ位置から遠いので赤い唇にある反射光など、細かい部分は見えないが、人を惹きつけて止まない

少女の眼差しだけはしっかりと焼き付けた。この親密な眼差しゆえ、モデルは妻か娘などの親しい人物ではないかとの憶測が出たが、特定の人物ではないという。背景はモナ・リザと違い闇なので、人物をしっかりと浮かび上がらせている。本物を間近にした興奮で、向き合う時間は短くとも、鑑賞者の心に長く残るだろう。

別の美術館では、「真珠の首飾りの女」も展示されているが、長蛇の列を敬遠した。しかし、会議の間にもう一か所寄る所があった。フェルメールが生涯残した全37点のリ・クリエイト作品が一同に展示されている「フェルメール光の王国展」だ。パンフによると「最新のデジタルマスタリング技術で、当時の色調とテクスチャーを推測し、原寸大で所蔵美術館と同じ額装を施して一室に展示する」という試み。複製品であることを除けば、混雑を避けられ、全作品を年代順に至近距離でじっくりと鑑賞できるのが魅力である。

リ・クリエイト品は本物を凌ぐかもしれない。この作品展の総合監修した分子生物学者の福岡伸一氏は『re-create』とは、複製でもなく、模倣でもない。あるいは洗浄や修復でもない。…文字通り、再・創造である。作家の世界観・生命観を最新のデジタル画像技術によって翻訳した新たな創作物である』と強調する。確かに当時の色を再現したので、色合いも実物より鮮やかな気がする。キャンパスの布の質感も表現されているから本物に限りなく近いだろう。かの「少女」も、リ・クリエイトされていた。その目の輝きはさらに鮮明で、真っ赤な唇は、「私は本物以上よ」とかすかに動いたようで思わず身震いした。

再現された当時のアトリエにも立った。窓から差し込む軟らかい光の下で創作活動していた画家の様子も重ねることができた。この展示会の方がフェルメールの世界にもっと近づけたような気がする。

人込みで長時間待ち、短時間で本物を鑑賞するか、リ・クリエイト品をゆったりと楽しむかは、あくまで個人の価値観の違いだが、筆者は混雑だけは避けたい。

残念ながら、出版物ではその絵の大きさも実物のオーラもわからない。芸術品の鑑賞には、対象物そのもの以外に展示環境や臨場感が不可欠だ。音楽でもCDよりライブの方が心に響くのと同じだ。そのためか、全作品を、所蔵博物館に直接出向いて鑑賞する「フェルメールフリーク」もいると聞く。作家の有吉玉青は「絵は記憶できない」ので、絵の前ではいつも新鮮な感動を覚えるという。一方で、見に行った時の記憶は鮮明なので、「絵は見るものではなく見に行くもの」との大胆な結論をつけたが、その気持ちはよく分かる。

今回は駆け足でフェルメールの作品に出会えた。時間は短かったが、出会えた興奮で筆者の心のキャ

ンパスには青い充実感が満ちた。

<参考>

- 1) 『フェルメールへの招待』 朝日新聞出版編集 2012.
- 2) 有吉玉青著「恋するフェルメール」37作品への旅 講談社文庫. 2010.
- 3) 朽木ゆりこ、福岡伸一:深読みフェルメール 朝日新書357 2012.

雑感2012夏

芦別市医師会
橋本内科医院

橋本 英明

中学校まで過ごした地元芦別市に、親の後継として戻ってきました。この地に戻るまで30年もの月日が流れ、この地で働き始めてやっと？9年目です。医報には、大学時代、勤務医時代にお世話になった諸先生から著名な先生、同期の先生方の趣味やら、文句やら、前向きな話や後ろ向きな話があり、大変楽しく読ませていただいています。

今年の夏の大きなニュースといえば、私的にはロンドンオリンピックよりは甲子園での大阪桐蔭の春夏連覇、それよりも市立芦別病院の医師住宅の取り壊しでしょうか。この夏、自宅前に重機が入り、朝から解体が何週にもわたり行われていました。騒音と舞い上がるほこりの日々でした。実は、私は3歳までその医師住宅で暮らしておりました。周囲はまだ舗装もされておらず緑豊かな土地でした。高校で芦別から離れ、以後、時々帰省する時には、そこに医師住宅があることが当たり前の風景でした。入れ替わりそこには新しい若い先生が赴任してきました。そのマンパワーのおかげで市民の命は守られていたのです。

新医師臨床研修制度の開始と時同じくして私は、釧路赤十字病院を退職しましたが、その頃から凄まじいスピードで地域医療は崩壊していきました。それは過疎化著しいこの地でもまさに当てはまり、現在に至るまで医師減にストップをかけることはできません。一時代の終焉なのでしょう。ついに医師住宅が取り壊されてしまいました。皮肉にも、現在その周囲には雑草が生い茂っています。自然が戻り、虫の音が大きく響き渡り、最近見かけなかった殿様バッタを見つけては子どもより自分が喜び、幼少期を懐かしく思い出しております。

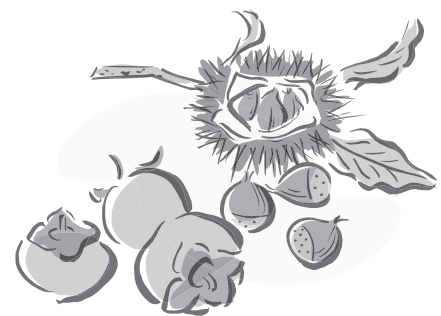
日々の診療を行いながら、最先端医療の着実なる進歩、薬剤の開発により恩恵を受けること大であります。超超高齢化社会を迎え、その受け皿もままならない現状をみるに、人間はどう生きるべきかを

改めて考えさせられています。

“康介さんを手ぶらで帰すわけにはいきません”という名文句を記憶に残しオリンピックは終わりました。患者さまに“何か”を残し、お帰りいただけるような心のこもった診療ができているのか、いつまでも自問自答してゆきたいと思います。皆様のご健勝をお祈りします。 残暑厳しいなか記す。



旧医師住宅跡地にて、久々に笑う母親とともに



繰り返せない人生～医者か研究者か～

札幌医科大学医師会

浦澤 正三

共感と好奇心

高校時代から将来は医師になりたいと考えていた。その理由は漠としたものであったが、患者を含む弱い立場の人たちへの“共感”と自分なりに生命そして死ということについてより深く知りたいという“好奇心”であったように思う。

「弱者に共感し、寄り添いたい」との気持ちが多くの若者を医療、保健、介護職などに向かわせ、医療もその一つといえる。一方、「さまざまなことに好奇心を抱く」ことも人間共通の特性で、その対象が人の体と心に向かうとき広義の医学研究者を志すことになるのだろう。医師を志す者は一般的にこれら二つの性向を有すると考えられるが、私の場合もこれら両特性は、生涯を通じての自らの行動を左右した最大の原動力であったと思う。

身近にいた北大医学部卒、札幌医大内科在職中の長兄（喜一）に「自分のようなものが医者になれるだろうか」と尋ねたことがある。「医学部に入っても必ず臨床医になるというものでもない。医学の研究を専門とする道もあるし、いいんじゃないか」と言われた。北大教養課程に入学し、医学部で必要と言われたドイツ語の勉強に身を入れた。2年後に札幌医大に入学した。

医学生・インターン時代

医学部の学生生活は楽しかった。早速バドミントン部に入った。一時、日赤学生奉仕団の無医地区訪問、大学演劇部の公演にも参加したが、ほぼバドミントン漬けの2年間だった。道内の大学対抗戦（インカレ）後の部員一同でのキャンプ旅行の思い出を含め、すべてが楽しく貴重な青春の玉手箱の中である。学部2年の秋から始まった臨床各科の講義、実習の始まりとともに未練を残しつつ部活動を断念した。3、4学年は夏季休暇を地方病院で臨床の現場を見学して過ごしたこともあって多忙のうちに過ぎた。

卒後のインターンは母校の札幌医大病院で行った。各科を回る1年の実地修練期間中に、臨床経験の一端にと放射線科で週1回入院患者の当直をさせてもらった。放射線治療を行うがん患者が多く、担当医の指示通りに麻薬を使う患者が結構いた。講義では聞いたことがなくターミナルケアという言葉も概念も知らなかったが、このような患者さんへの対応の難しさを思い知らされた。

この年他界した父に対しても同じ戸惑いを味わっ

た。生来頑健であった父が食欲不振、体重減少を訴え、札幌医大第1内科に入院し胃がんと診断された。母が泊り込みで付き添っていて、兄は医師として病床の父を時折訪れていたが、本人には胃潰瘍と告げられていたため、私は病院にいたものの父との会話をできるだけ避けていた。母から「正三は近くに居るのにどうして訪ねてこないのか」と父が言っていたと聞き、申し訳なく思った。外科で開腹手術を受け病変部を切除したが組織学的にはスキルス胃癌で手遅れであった。手術日の夜は父のベッドサイドに座して一夜を過ごした。病室の暗闇の中で術後の朦朧状態の父が突然手を伸ばし、天井からぶら下がった糸の先のビーズ玉でも掴むかのように、何度もなんども空中に手を泳がせていた様子が影絵を見るように思い出される。手術後内科に戻り間もなく他界した。64歳だった。

内科入局から衛生学大学院へ

部活動などであまり勉学に身の入らぬ学部1、2年ではあったが、一部の基礎医学科目やその研究には興味を持った。学部3、4年では各科の講義と実習、地方病院での臨床現場の見学を通して関心が次第に内科学に向いていったのは事実であるが、母校の病院でのインターンを終える頃には、周りの同期生と同様、当然のようにためらいなしに臨床医になるという気持ちになっていったのも今から考えると不思議なことである。こうして内科学を専攻することとし、兄もかつて在職した母校の第1内科（主任：和田武雄教授）に入局した。

内科医になると決めたまの臨床に直結した医学の研究に興味があったので大学院への進学を希望した。人生とは先の見えないもので、これが生涯の分かれ目となった。事情によりこの年の入学枠は先約のO先輩の1つしかなく、入学希望の私と同期生の木下博、野間昭夫の両君は将来の臨床の場を和田内科に約束しつつ、それぞれ異なる基礎医学教室の大学院生としてスタートすることとなった。私は衛生学の院生となったが、内科教室の主催する研究会や年間行事にはできるだけ出席した。学位論文を3年で済ませ4年次の副科目（内科学）から臨床に戻る予定であった。

時は昭和35年、ポリオの全国的大流行制圧のため生ワクチンの緊急輸入が行われた。衛生学の金光正次教授は児童へのワクチン投与による効果判定の責任者であったため、同年衛生学助手となった同期生2人（小川幹雄君、菅野价子さん）と私は、便中のワクチンウイルスの検出と血液中のポリオ抗体価の測定に従事し、その成果の概要は3人の連名による「生ポリオウイルスワクチンの野外投与実験」（1～3報）として発表された。ワクチンウイルスと野外で流行する他の腸内ウイルスの干渉に関する私の学位論文3報も前者を発展させたものであるが、教授より追加を指示された第3報（インビトロ研究）の

実験と論文原稿の作成は副科目の内科の臨床が始まった4年次に持ち越された。

臨床と研究、掛け持ちの1年

内科では、最初6人部屋、次いで4人部屋、一時重患の2人部屋の担当医を命ぜられた。当時基礎医学棟と病院の両玄関は、現在ミニ公園風に植栽されている16-17丁目道路に面して向かい合っていた。午前中に患者の回診と検査等の指示出し、研究室に戻り最後の論文に関する実験と論文草稿を書き、午後に再び病室を訪ね診察と必要な処置を行うという、道路を渡って行き来する1年を過ごした。

卒後3年を経たとはいえ、新人同然の医師に先輩医師が相談にのってくれたのも最初の2、3週間程度で、間もなく多くの先輩も地方病院に赴任し、入れ替わりに地方病院で研修を終えた卒後1、2年の意気盛んな後輩医師たちが戻ってきた。8月、和田教授ご夫妻のご媒酌で同期の衛生学助手、菅野价子と結婚した。

今、臨床研修当初に受け持った患者さんについて記したメモノートを開くと、多彩な診断名と共に、それぞれの患者さんとのさまざまなやり取り、苦労した診断、てこずった治療のあれこれが思い出される。大変だったが、気持ちは張りつめており無我夢中の毎日であった。しかし、医局に残るほぼ最年長の医師の立場に立たされてみると3年間の臨床のブランクは痛かった。和田教授には助手の席を用意すると告げられたが、論文原稿の目鼻がついた頃から将来のことを考え始めた。自分の能力、性格からすると、将来は「患者のことのみ考える市井の医師となるか、好奇心に任せて研究に四六時中没頭できる研究者となるか」の二つに一つだと考えた。加えて、研究を続ける妻の立場を考えた時、たまたま助手の席があり、過去3年余を過ごした衛生学教室で研究生生活を送れることはこの上ない幸せと思われた。和田教授には自分勝手に大変申し訳ないの一本やりで平身低頭して衛生学の助手となる道を選んだ。

医者か研究者か

臨床医を目指した身が上述のような経緯で臨床を離れ、衛生学の教育と研究を生涯の仕事として定年を迎えた。教員として学生と接するようになって、学生に「どうして先生は衛生学教室に入ったのですか」、「研究ってどんなものですか。面白いですか」と問われ、「自分は能力がないので基礎医学のような研究者には向かない」などと言うのをよく聞いた。学生と話しながら、なぜ基礎医学に入ってくる学生がこうも少ないのかと考えた。結論は、「医学部に入学した学生は特別のことはない限り、6年間エスカレーターに乗せられ運ばれた末に臨床医というプラットフォームに押し出される。すなわち医学部とは、6年間何の矛盾も感じさせずに学生を臨床医に仕立て上げる臨床医製造システムである」ということである。

医学部最初の4年間（今は臨床医学が4学年早々から始まるようであるが）の一般および基礎医学教育は、あくまでも臨床医になるための準備段階に過ぎず、これらの踏み台の上に最終目的である5、6学年の臨床医学がある。臨床医学の講義、実習に入ると学生は患者に接する機会が増え、疾病の診断と治療に関する知識、技術の習得が弱者である患者への共感と相まって若い学生と患者の距離を一段と近づけることとなり、学生はごく自然に臨床の世界に入っていくことになる。国家試験に合格し医師免許証を取得することもこの傾向を助長する。これは自らを顧みての実感である。

しかし、学生時代とその後の医師、研究生生活を振り返ってみて、医学部の卒業生で医者に向かない者などほとんどいないように、大部分の者は研究者としても十分やっつけていける能力を持っていると思う。もし4年次頃までの学生に研究の真の醍醐味を味わう機会が与えられるならば、研究者になる学生もかなり出てきそうに思うが、現行制度の下では不可能だろう。

自分の場合、臨床医と研究者という両者の実態をある程度知った上でいずれの道の選択も可能であったことは幸いであった。臨床においても学位のための研究があり、研究の醍醐味を味わう機会は十分あるという反論もあろうが、臨床の多忙な中で指導者の指示のままに行う研究は楽しみではなく苦しみに近いのではなかろうか。実は私自身、胸震えるような研究の喜び、楽しさを知ったのは学位の研究においてではなく、大学院を終えて衛生学教室に入り直した後のことであった。自らが世界でただ一人知りえた知見を発表し、学会大御所の「あり得ない」の発言に、実験結果はそう示していると答えた時の誇らしさは忘れられない。臨床に進んだ医師たちの多くが生涯このような喜びを味わうことなしに終わってしまうことを本当に残念に思う。

しかし、とふと考える——もし自分が臨床医になっていたらまた異なる胸震える感動、喜びがあったのだろうか。繰り返しのできない実験といわれる人生、所詮は一つの道しか歩めないのである。



故郷

北見医師会
北見赤十字病院

菅原 亮一

平成9年卒の眼科医です。旭川医科大学眼科の所属で、現在、北見赤十字病院に勤務させていただいております。北見市は私の生まれ故郷であり、北見赤十字病院は私が生まれた病院でもあります。昭和47年に生まれ、高校から親元を離れ函館ラ・サール高校を卒業後、旭川医科大学に入学しました。卒業後は母校の講座に入局し、大学院や各地の関連病院勤務を経て、平成21年から現在の病院に勤務させていただいております。

親元を離れてからも毎年のように故郷に帰省してはありましたが、久しぶりに住むということになって実感するのが少子高齢化ということです。私が子どもの頃は、駅前を中心部は東急百貨店をはじめとするいわゆるデパートがいくつも立ち並び、買い物客や子どもたちが溢れ、休日平日問わず賑やかで都会的な雰囲気といっぱいだった記憶が今も鮮明に残っているのですが、現在の駅前にはデパートがほぼすべて閉店し、建物は取り壊されるか空きビルの状態、思い出深い商店街もシャッターが下りたまの店が多く、休日でも人通りはまばらです。現在は郊外の大規模ショッピングセンターに人々が集まってしまう影響もあるのですが、かつての活気が信じられないほどに失われています。私が入学した小学校はかつて1学年7クラスあり、途中から新設された小学校に生徒を分割しなければならぬほどマンモス化していたのですが、今では1学年1～2クラスほどになっているそうです。長く住めば住むほどあちらこちらに町の変化を実感します。

そんな中、日ごろ診療を行っている、かつてお世話になった学校の先生、両親の友人、知人の方々が患者さんとしてこられることもしばしばあります。私自身が記憶していなくとも、かつて何らかの形でお世話になった方々がたくさんいるはずで、そういった方々を含め、故郷に少しでも恩返しができるという気持ちを持ちながら毎日の診療を行っております。私的な面では、両親に孫の顔を見せてあげられる機会も多く、今まで数限りない親不孝を重ねてきた分を少しでも親孝行して返してあげたいとも思っております。私自身、あくまでも医局の人事で動いている身分ですので、希望してもいつまでこの地で勤務できるかわかりませんが、お互いに姿かたちは変わったとはいえ、自分が生まれ育った故郷、いつになっても居心地のいい故郷に、少しでも長く、質の高い医療を提供して、貢献できればいいなと思っております。

滝口入道と平家物語そして黒田節

旭川医科大学医師会

奥野 晃正

何年も前のことになるが、小学生の娘が突然声を挙げて泣き出したことがある。何ごとかと様子を見ると『フランダースの犬』を読んでいた。感動のあまりの涙と分かり安心し、同時に娘の感性を嬉しく思ったことがある。人前で泣いたり、涙を流したりするものではないとするのは、大人の一般常識である。しかし、感動して涙を流す感性は持ち続けたいものである。

己を省みて、子どもの頃は別として、涙を流したことは数少ない。そのうちの一つは、大学に入って間もなく高山樗牛の『滝口入道』を読んだときである。突然、涙があふれた。ヒロインの横笛が自分のために、恋のライバル一人は命を落とし、一人は出家したことを嘆いた部分である。そのことを友人に話したところ、失恋でもしたのだろうと相手にされなかった。ロマンのない奴は話しにならんと、内心大いに不満だった。

最近になって、あの感激をまた味わいたいと読み返した。内容を既に知っているためか、歳を重ねたためか、残念ながら涙は流れず若い日も戻らなかった。高校時代の文学史で、平家物語に題材をとった物語であると習ったことを思い出し、なんと書いてあるか読んでみようと思い立った。滝口入道についての記述は平家物語の終わりに近い部分にあった。平維盛が屋島の陣を抜け出して高野山に至り、滝口入道に会って出家し、やがて入水するまでのくだりである。そのエピソードとして、斎藤滝口時頼は建礼門院に仕える横笛に恋したが、父に強く意見され諦めきれずついに出家した。これを知って横笛も剃髪した。その後、修行に励み高野の聖と呼ばれるに至ったとある。

樗牛の滝口入道とは多少の違いがある。平家物語そのものは、調子のよい文章で面白く読み進むことができた。そのうちに気付いたことがある。小督の部に「峰の嵐か松風か、たずぬる人の云々」の文があった。これは黒田節の二番と同じではないか。一番の「酒は呑め呑め」は黒田家の家臣母里太兵衛が福島正則から日本号の槍を呑みとった話である。二番の内容は一番と全く関係がない。平家物語の一節が黒田節に取り入れられたのなら、その経緯はどのようなものだろう。